

# ドイツ語圏の中等教育改革に関する一考察

——オーストリアにおける Neue Mittelschule の取り組み——

伊 藤 実歩子

## A Study of the Reform of the Secondary School System in German-speaking Area

ITO Mihoko

**Abstract :** This is a study of the reform of the secondary school system in Austria, especially focusing on curriculum and lessons at Neue Mittelschule (NMS : New Middleschool), which was newly-established after PISA-Shock. The school system in German-speaking area has been discussed from the political standpoint before the World War I. The problem is children of 10-year are separated into Hauptschule (connected to vocational course) or Gymnasium (connected to academic course), which is very early separation compared with other EU countries. In this paper I would like to examine the curriculum and didactics at NMS and also point out the characteristics of this new school by using the report of Ministry of Education and the interview of the NMS teachers.

### 1. はじめに

2000 年以降、ドイツ語圏においては、PISA 調査の結果が振るわず、PISA ショックと呼ばれる子どもたちの学力低下が国家問題として浮上し、各国が教育改革に邁進している状況にある。筆者は同地域の改革の中でもとりわけ 2000 年頃から開発・試行されてきた教育スタンダードとスタンダードテストの導入に着目し、いくつか検討を行ってきた<sup>1)</sup>。ドイツ語・数学・外国語において定められた学年までの教育スタンダードを設定することで学校教育におけるアウトプットを明確にし、学力を保障しようというのがこの改革の目的である。これまで教育のプロセスを大切に、教師の教育の自由に任せてきたドイツ語圏の教育の歴史からみれば、この教育スタンダードの動きは「パラダイムの転換」<sup>2)</sup>とみなされるほどに、大きな意味をもった改革である。

学力低下の事実をドイツ語圏につきつけた PISA 調査の分析は、同地域の教育を特徴づける分岐型教育制度において生じる教育機会の不平等に関する問題も指摘した。すなわち、10 歳段階での進学・就職コースへの選抜が行われることによって、後者の子どもたちが通うハウプトシューレ (Hauptschule) の高いドロップアウト率、ギムナジウム (Gymnasium, オーストリアでは Allgemeine Höhere Schule という名称、以下 AHS。ただし、必要に応じてギムナジウムという名称も使用する) の子どもたちとの学力格差、進学機会の格差が生まれると指摘されたのである。

一方では学力低下、また他方では教育機会不平等という問題を抱えながら、本稿で取り上げるオーストリアでは新しい中等教育学校を設置する試みが行われている。一般的に 4 年間の基礎学校 (Grundschule または Volksschule) の修了後に置かれているこれまでの 4 年制のハウプトシューレに代わる、Neue Mittelschule (以下、NMS と略称) である。

NMS の教育コンセプトを見ると、「ドイツ語、数学、英語の授業は教育スタンダードを志向する。各生徒の広

い能力のプロフィールの育成に、とりわけ重点を置く』<sup>3)</sup>とされ、施行されて間もない教育スタンダードによる授業を、NMS において実践かつ徹底するというシナリオがあると思われる。それによって、PISA 調査で批判的になった、学力低下という教育内容・方法の問題と早期選抜という教育制度の相互に絡まりあった問題を解消しようとしているのである。

教育スタンダードと NMS、両者ともに PISA ショックを受けて教育全般が刺激された中の取り組みであることは間違いない。一方、日本においても、PISA 2003 において読解力の結果が振るわなかったことを受け、いわゆる PISA ショックがおこり、読解力向上のためのさまざまな取り組みが教育現場でもみられるようになった。これを受ける形で、新しい学習指導要領において、言語活動の充実や「習得・活用・探究」による学力モデルの提示などが盛り込まれたことは周知のとおりである。しかしながら、オーストリアのような教育制度までも含む大規模な改革は、今のところ日本には見られないものである。つまり、PISA ショックあるいは学力低下の要因として、学習指導要領の存在そのものが問われたり、現行の教育制度が問題だとして指摘されるような動きは見られなかったのである。

オーストリアが学力低下を克服しようと取り組んでいる改革を、教育制度の側面から明らかにすることが本稿の第一の目的である。また加えて、上述の意味においても、すなわち、日本の PISA ショックとそれへの対応を相対化するためにも、PISA と OECD が国や地域に及ぼす影響を、オーストリアの事例から明らかにし、その検討を試みたい。

そこで、本稿では、まずオーストリアの前期中等教育段階 (Sekundarstufe I) の歴史を概観した上で、現在の NMS 改革の特徴を明らかにする。その際、着目するのは、NMS のカリキュラムと授業の方法である。同時に、教育スタンダードの実施状況や教員の受け止め方についても言及することで、教育スタンダードと NMS による教育改革の実践的な側面をより多層的にとらえたい。そのために、公表されている教員へのアンケートや新聞報道、および筆者が行った教員インタビューを資料として参照する。最後に、オーストリアの NMS の改革を相対化するために、ドイツ語圏が持つ教育文化の視点から、その限界や課題を指摘しておきたい。

## 2. 前期中等教育 (Sekundarstufe I) をめぐる問題の歴史

### (1) 戦間期

10 歳段階での早期選抜を行う分岐型の教育制度は、長くドイツ語圏の教育の問題として、政治の重要なカードとして切られてきた。保守派は、その支持層からギムナジウムの存続を主張し、対して改革派は一貫してギムナジウムの特権を許さず、単線型の教育制度を主張してきた。第一次世界大戦後、ドイツと同様にオーストリアでも新教育運動が起こり、社会民主党政権による教育改革では、教育制度としての統一学校 (Einheitsschule: 図 1 参照) と教育内容・方法としての労作学校 (Arbeitsschule) から成る民主主義による教育が目指された<sup>4)</sup>。しかしながら、統一学校は、保守派の激しい抵抗によって挫折し、結局この改革は後者の労作学校による教育内容および方法の改革に終始したという歴史的経緯がある。同様の動きが戦後にも幾度も見られたものの、現在においても上述の通り、分岐型の教育制度が保たれている。

### (2) 第二次世界大戦以降

1962 年の学校教育法改正で、義務教育年限が 8 年から 9 年に延長された。義務教育年限内に、ハウプトシューレと後期中等教育 (Sekundarstufe II に接続) のギムナジウムが並列しておかれ、戦後のいわゆる分岐型の教育制度がこの時点で完成する (図 2)。

ハウプトシューレは成績によって AHS へ進学、職業教

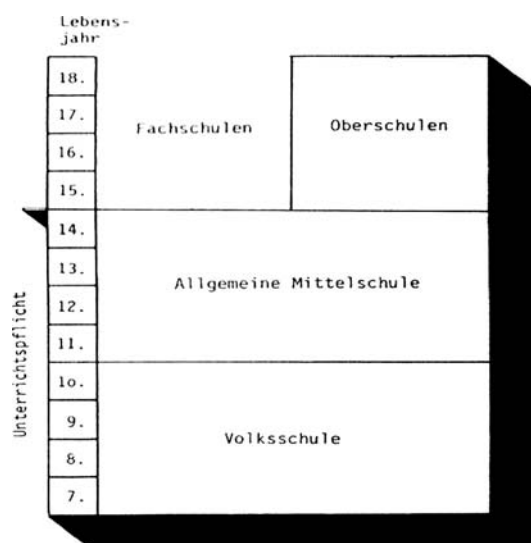


図 1 戦間期の教育制度改革案

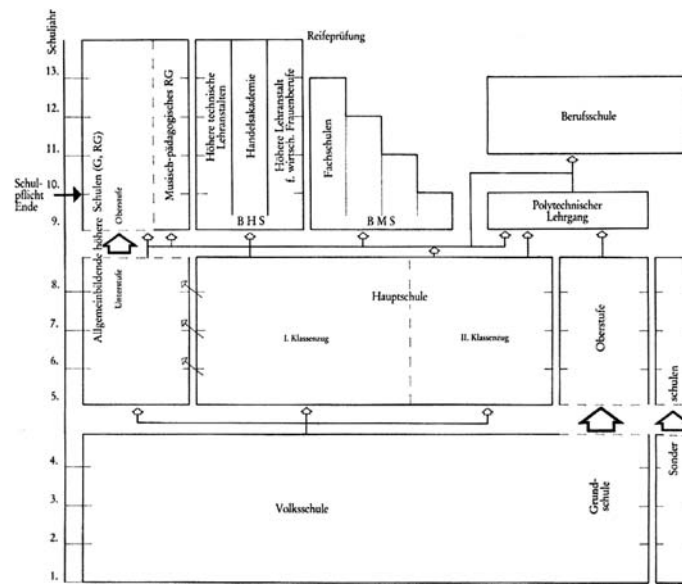


図2 1962年学校教育法改正時点での教育制度

Josef Scheipl/Helmut Seel, *Die Entwicklung des österreichischen Schulwesens in der Zweiten Republik 1945–1987*, LEYKAM VERLAG GRAZ, 1988, S.52.

育学校・機関への進学という2つのコースが設けられている。AHS と呼ばれるオーストリアのギムナジウムは、4年の下級段階（Unterstufe）と5年の上級段階（Oberstufe）からなり、第5・6学年（AHS 第1・2学年）はひとつのコースであるが、第7・8学年からギムナジウム・リアルギムナジウム（Realgymnasium）に分かれる。さらに、第9学年以上はギムナジウムが人文（ラテン語）／新言語（イタリア語・フランス語）／実学、リアルギムナジウムが自然科学／数学／経済とさらに細分化される。この制度は、基本的に現在も継続され、制度上、ハウプトシューレから AHS 上級段階への移行も可能だが、6% という少数にとどまっているのが現状である。

以上のように、オーストリアを含むドイツ語圏の教育制度の問題は、非常に長い歴史を持っており、それゆえに解決が一筋縄ではいかない。90年代には一旦収まったかに見えた教育制度の問題は、PISA によって再燃（再々燃）したのである。

### 3. Neue Mittelschule（NMS）の改革——カリキュラムと授業方法の特徴——

#### (1) NMS の設置趣旨

2008年の教育制度法改正によって、図3のように NMS の設置が決定された。まだ試行段階中ではあるが、2011年現在 NMS の数は434校に上り、教育相のシュミット（Claudia Schmid）は、「2016年までにすべてのハウプトシューレを NMS にする」と宣言し、またウィーンではそれに先駆けて2014/15年度までにおよそ100校あるハウプトシューレをすべて NMS に改編することが決定された<sup>5)</sup>。教育スタンダードの試行が2000年であったのに対して、NMS の設置は2008年からと比較的時間があいたのは、上述のように、教育制度の問題はドイツ語圏において政治的に非常にナイーブな問題であることが関係していると思われる。

さて、その NMS の設置趣旨を、少し長くなるが次に引用しておきたい。

現在の制度で6–10歳までで共通の学校（Grundschule または Volksschule）が終わってしまうのは早すぎる。9.5歳で「アカデミックな」AHS と「実践的な」ハウプトシューレのキャリアに子どもたちを分けてしまうのは、世界的に見ても最も早く、それでは教育的そして社会的にも競争力があることを証明できない。この年齢では、子どもの能力や才能はまだまったく明らかではない。（中略）早期分離（Trennung）によって多くの能力や才能は失われてしまう。（中略）高いドロップアウト率と高い補習教育はこの早期分離によって導かれている。ドイツを除くすべての EU 加盟国ではより遅い時期に選抜している。過去十年間のすべての重要

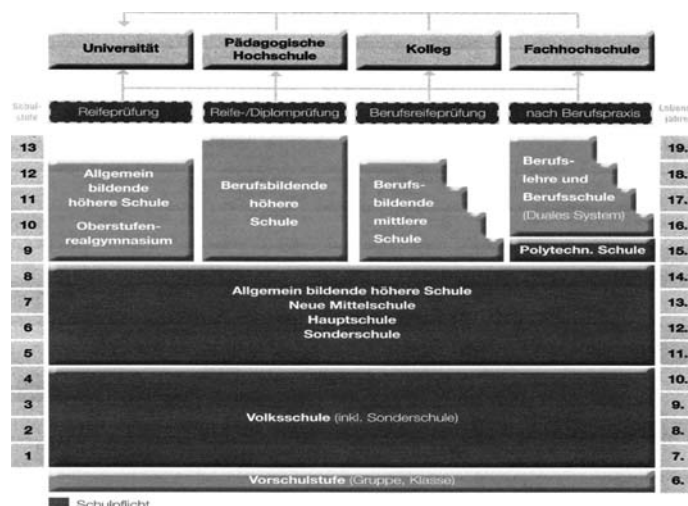


図3 NMSを含む現在の学校教育制度

[http://www.bmukk.gv.at/medienpool/17295/bw\\_dt\\_10.pdf](http://www.bmukk.gv.at/medienpool/17295/bw_dt_10.pdf) (2011/09/15)

な国際調査または国内調査（OECD の PISA 調査）では、能力の多様性に対して、早期選抜（Selektion）の負の影響を示している。

[http://www.neuemittelschule.at/fuer\\_eltern\\_schuelerinnen/25\\_fragen\\_zur\\_neuen\\_mittelschule.html](http://www.neuemittelschule.at/fuer_eltern_schuelerinnen/25_fragen_zur_neuen_mittelschule.html) (2012 年 9 月 18 日)

この設置趣旨からは、早期選抜の解消、経済競争力を有する効率的な人材の育成、PISA 調査結果に基づいた教育制度の欧州標準化という 3 つの大きな目的を読みとることができる。とりわけ、早期選抜の解消に関しては、PISA が示したヨーロッパの標準的な教育制度との関連から強く主張されていることがわかる。

## (2) NMS のカリキュラムと授業の特徴

それでは、NMS では実際にどのようなカリキュラムで、またどのような授業を展開しようとしているのだろうか。それは上記の設置趣旨にあったような理念を実現するものとなっているのだろうか。

### ①AHS のカリキュラムを導入

NMS のカリキュラムは、AHS 下級段階のレーアプランに基づいて授業が行われる。すなわち、これまでのように、ハウプトシューレ、ギムナジウムなど学校種ごとに定められていたような NMS 独自のカリキュラムがあるのではなく、NMS は AHS（ギムナジウム）の下級段階のカリキュラムを採用する。すでに、ハウプトシューレと AHS 下級段階のレーアプラン（日本の学習指導要領に相当）の総則部分（一般教育目的、教授原則、学校・授業計画）は同じものが採用されているが、授業時間数は両者において異なっていた<sup>6)</sup>。つまり、すでにハウプトシューレと AHS は NMS 導入以前にカリキュラム上の接近が試みられており、今後、教育相の宣言通りすべてのハウプトシューレが NMS になるとすれば、事実上、前期中等教育のカリキュラムは AHS 下級段階に一本化されることになるわけである。

### ②AHS 教員とのチームティーチングを導入した授業

NMS に関連する HP やパンフレットを見ると、その教育のコンセプトは以下のように多岐にわたっている。すなわち、個人化・多様化／終日化／スポーツ・芸術の重点化／インテグレーション／ジェンダー差の克服／e ラーニング／外部エキスパートの導入である<sup>7)</sup>。このように、NMS では、AHS ともハウプトシューレとも異なる新しい授業の方法が取り入れられることが強調されている。なかでも授業の方法に関連して注目すべき点は、最初に掲げられている教育の「個人化・多様化」というコンセプトである<sup>8)</sup>。

モデル試行の NMS では、能力と関心の多様性のために革新的な授業を行う。その中心は、フレキシブルで常に新しく組み替える学習グループの設置である。学習が苦手な生徒は、レベルの高い課題を、討論によって、またそれを‘模範となる’生徒とともに作業することによって、よりよくできるようになる。よくできる生徒たちは、個別学習、教科横断型の授業形式、多様な授業を提供される。

すべての生徒が各教科を同じようによくできるわけではない。変化に富んだ学習を多様に提供することによって、NMS は、異なる能力と関心に、よくできる生徒もそうでない生徒も同じように対応する。

具体的に、NMS では、

- ・新しい、協同的で開かれた授業形式（小グループ授業、チームティーチング）
- ・実践志向、探求型・テーマ型授業
- ・教科横断的、プロジェクト志向、自律的学習
- ・促進コース、個人学習プログラム

を提供する。

（下線は引用者による）

上記下線部の通り、NMS の授業は、グループ学習を基本に、探求型・テーマ型授業や教科横断的、プロジェクト志向の学習などをその特徴としている。それは一斉授業をその典型とする AHS との違いとして強調されている。また加えて、このような授業の実現のために、AHS の教員と NMS（元ハウプトシューレ）の教員によるチームティーチングという授業の方法を取っている。従来、ハウプトシューレでは、AHS への移行が可能な上位層と職業訓練へ移行する中間層によって習熟度別学級編成が行われてきたが、NMS では、上述のようにいわば協働学習や自己学習の導入によってそれは行われない。ただし、「個人化」とあるように、個人の興味・関心あるいは作業テンポに応じた授業編成は行われる。

#### 4. NMS と教育スタンダード——BIFIE アンケート調査とインタビューより——

さて、以上のような NMS の実態を、教育省管轄の研究所（BIFIE）や教育省が調査したアンケートや、NMS に対する社会の受け止め方を示す新聞記事、筆者が行った教員インタビューなどを資料として参照することで、NMS の全体像を多層的に把握してみたい。またその際、先行して取り組まれている教育スタンダードに着目する。NMS の授業は、先行して導入された教育スタンダードに基づいて行われることになっているからである。

##### (1) BIFIE レポート

NMS とそれよりも先に取り組まれた教育スタンダードの関係性を具体的に示す文献に、「BIFIE-Report 6/2010 Bildungsstandard auf dem Weg in die Praxis」という調査報告書がある。この報告書は、2009 年秋に、教育スタンダードの実態を調査するために、教員、学校長 1400 人以上に行ったアンケート結果をその内容としている。質問項目は多岐にわたるが、ここでは、教育スタンダードの使用状況と教育スタンダードに対する教員の負担感に限定して、簡単にまとめておきたい。

「授業の中で、教育スタンダードを使っているか」という質問に対し、全体（VS, HS, AHS, NMS, KMS）では、7 割弱が「定期的に使用している」か「ときどき使用している」と答え、およそ 3 割が「使用していない」と答えた。また NMS に限ってみれば、「使用していない」が 52.2% と半数以上となっている。ただし、NMS は回答数が他の学校種に比べて絶対的に少ないことが影響している。

次に、「教育スタンダードは、授業に関わる作業を軽減したか」という質問に対しては、全体の 1 割が軽減したと答え、2 割が増えたと答えている。学校種別にみると、NMS の 15% ほどが軽くなったと答えているものの、3 割近くが、作業の増加を感じている。

以上のことから、AHS と NMS の教員は、ハウプトシューレの教員よりも、教育スタンダードによって仕事が増えたと感じていることがわかる。また、このレポートによると、ハウプトシューレの教師は、AHS の教師よりも実践において教育スタンダードが役に立つと評価している。ハウプトシューレの教師にとっては、日々の授業に関わる作業において、基礎能力の保障や学力低下の問題に教育スタンダードが役に立っているとある（S.90-

91)。

## (2) 保護者アンケートと全国 AHS 保護者連盟の声明

次に、教育省が NMS に子どもを通わせている保護者に NMS に関する満足度調査を行った報告書「Zufriedenheit mit der Neuen Mittelschule Elternbefragung 2011 Studienbericht」を見てみよう。

この報告書では、一貫して NMS に対して高い満足度が出たということが強調されている。90% の生徒が NMS に喜んで通っている、82% の保護者が子どもの能力に適した教育がおこなわれていると感じている、75% の保護者が NMS に満足している等の数字が並んでいる。これを受けて、教育相は「NMS は十分に成功した！」と宣言するにいたっている<sup>9)</sup>。

ただし、同様に保護者の側ということに目を向ければ、全国 AHS 保護者連盟 (AHS-Bundeselternverband) は、NMS の趣旨に賛同はしつつも、AHS の教育の質の低下を懸念して NMS の拡大に反対を表明し、次のように述べている<sup>10)</sup>。「われわれは、NMS をハウプトシューレの格上げとみなしている。しかし、AHS の下級段階は、オルタナティブとして残さなければならない。このことは揺らいではならない」。また、カトリック保護者連盟も、「NMS のティームティーチングなどによって主要教科の教員が配置換えされるのは、教員不足のこの時代に疑問である」と述べている<sup>11)</sup>。このような発言の背後には、後述するドイツ語圏において顕著に見られるギムナジウム信仰とでも言うべき教育文化が影響していると考えられる。

実は、制度上、前期中等教育はハウプトシューレだけでなく、AHS 下級段階を NMS にすることも可能だが、現在の NMS 320 校のうち、AHS から NMS への変更は 11 校とごく少数にとどまっていることも<sup>12)</sup>、上述のギムナジウム信仰を裏打ちするものと考えられる。

以上のアンケートからは、NMS のコンセプトに対しては概ね肯定的な意見があるということ、ただし、それとは裏腹に、教育スタンダードとの並行実施という点においては十分な関連性が見いだせないこと (教育制度とカリキュラムの乖離／矛盾)、また拡大する NMS を成功例とする教育省関係者の楽観的な見方に対して、AHS からは依然 NMS の拡大、すなわち NMS に一本化される単線型の教育制度に疑義が示されているということがわかる。

## (3) 適応する教師の実態——NMS の教師インタビューより——

ここでは、筆者が 2011 年 2 月にウィーンで行った NMS に勤務する教員へのインタビューを紹介する。これによって、NMS と教育スタンダードに対する教師の受け止め方および上述した NMS の「個人化・多様化」のコンセプトの実態が明らかになる。

教員 A は教職歴 31 年目、勤務校 (ニーダーエストライヒ州) において BISTA 実施<sup>13)</sup>の責任者をつとめている。勤務校はハウプトシューレから Neue Mittelschule に再編成された。2011 年当時は、ハウプトシューレに在籍する生徒と NMS の生徒が同じ学校内にいる状態である。

### 〈インタビュー 1〉

教育スタンダード (BISTA) のことを聞いたとき、とても面倒で、それにアンフェアなことだと思いました。例えば、今、わたしの担当する学級の 18 人の子どものうち、いわゆる「オーストリア人」は一人しかいません。残りはぜんぶ母語をドイツ語としない子どもたちです。彼らがスタンダードに到達することは非常に難しいことだと思います。

……もうすぐ退職する教師たちは、スタンダードに興味がないようです。……わたし自身の変化に関していえば、BISTA を導入するようになってから、わたしはこれまであまり「聞く (Hören)」ということをやってこなかったことに気が付きました。それで、自分の授業に「聞く」ことを取り入れてやるようになりました。毎時間の始まりに「ティル・オイゲンシュピールの愉快ないたずら」を子どもたちに読んで聞かせるのです。彼らは喜んで聞いています。

このインタビュー 1 からは、次のようなことが読み取れると思う。すなわち、第一に、教師は教育スタンダードと NMS に自分を適応させようと努力しているということである。先のアンケートでは、NMS では半数が教育スタンダードを授業に使用していないという結果があったが、インタビューした教師 A の中ではこれらを一連の改革として受け止め、取り組んでいることがわかる。

教師 A が勤務する NMS の校長は、ある雑誌の中で次のように述べている。「わたしたちは、一斉授業とまちがい探しをやめたいと思っている。わたしたちは、子どもが新しく何を学んだかを見て、（まちがい探しではなく：引用者注）この学習の成長を、評点に反映するべきなのである」。この校長の言葉からも、彼らが NMS という新しい学校で、教育スタンダードという新しい基準を取り入れながら、新しい授業観を形成しようとしていることが分かる。そのひとつの例として、新しい授業風景が、同じ雑誌に次のように描かれている。「書き取りの授業も、昔とは全く違うものになった。それぞれ番号がふられている 9 つの文章からなるテキストが、教室の中の異なる 9 つの場所におかれている。子どもたちは、教室の中を歩き回りながら、これらの文章を覚え、最後にノートに書き込む。最初の点検は、子どもたちにやらせる。それぞれで比較してから、教師のところへ行く」。これだけでは十分に授業の様子をとらえきれないものの、椅子に座り教師の発する言葉を聞いて書くという「書き取り」の授業の典型に対して、教室で子どもの動きがあることや子どもたち同士で点検しあうことを強調することによって、協同学習の様子、すなわち子どもたち同士が学び合うことが新しい授業像なのであるということが示されているのだろう。

第二に、教育スタンダードが教師自身のこれまでの実践を振り返る機会になっているということである。教師 A はドイツ語の教育スタンダードに設定されている「聞く」領域がこれまで不十分であったことに気がつき、読み聞かせを取り入れるようになり、子どもたちからも十分な手ごたえを得ていると答えている。

〈インタビュー 2〉

もちろん仕事の量は増えました。Neue Mittelschule になったので、常に三種類（AHS, Hauptschule, Sonderschule）のレーアプランに基づいて授業をするというのも関係しています。BISTA について同僚と話す機会も増えました。Neue Mittelschule では常に二人のチームティーチングで教えるからです。昔はこのようなことはありませんでした。（仕事は増えても）子どもたちのためになるなら、そして自分も自分の仕事に満足したいからやります。でも、能力給になればいいのにも思います。一生懸命頑張っても、給料は怠けている人と同じですから。

国語（ドイツ語）の授業は、AHS の教師が、こちらに来て二人で一緒にいつもやっています。AHS の教師たちは、NMS で授業をすることや、自分たちの一斉授業の仕方を変えることを嫌いますが、彼はそんなことはありません。とても喜んでやっています。でも、最初のころ、彼はとても緊張したようです。なぜなら AHS とは全く違う授業のやり方だからです。例えばこういうことがありました。彼がはじめて生徒たちの前に立って授業をしたときのことです。授業が終わった後、彼は汗びっしょりになっていました。彼は演劇を趣味にしており、舞台にもよく立っているというのに！それほどに、彼にとっては、NMS での経験は新しく、またプレッシャーにもなっているようです。

（二つのインタビューは、筆者が 2011 年 2 月のインタビューで行ったものを、内容別に区分したものである。また、下線は筆者による。）

このインタビュー 2 からは、NMS への改編に伴って、教師の仕事量が増えたことがまず理解できる。ハウプトシューレから NMS への移行期であるために、特別支援学級のカリキュラムと合わせて 3 種類ものカリキュラムを操り、しかもその授業が教育スタンダードを達成できるものであるかどうかの吟味も日常的に行っているのである。ただし、それによって教育スタンダードに関して教員たちの間で必然的に議論が起こっていてもいることは興味深い。また、AHS とハウプトシューレの教師たちのチームティーチングが、教師たちの協働性や省察を促していることがわかる。AHS の教師は、これまでとは「全く異なる授業のやり方」（上記インタビューより）に戸惑いながらも、新しい授業に取り組んでいる様子がこれを示している。

ただし、第四に、このインタビューは教育スタンダードの責任者である教師に行ったことから、優秀な、あるいは良心的な教師たちの負担を増やし、それによって能力主義による教員評価の考えをよぎらせる可能性もあるということには注意を要するだろう。

## 5. NMS 改革の限界？——二極化する教育制度——

オーストリアにおける NMS の取り組みは、教育省によれば概ね好評を得て進められているということは先述のとおりである。またインタビューからは、（良心的な）教員もこの改革を受け入れ、適応していることが確認で

きた。ただし、最後に、この取り組みをより相対化してみるために、これまでの教育制度をめぐる議論を踏まえておきたい。それは大きく二つの論点から成るだろう。すなわち、単線型の教育制度の効果およびギムナジウムの選抜機能という論点である。

### (1) 単線型教育制度の効果に対する疑問

近藤孝弘は、ドイツの PISA ショックの要因を分析する論考の中で、総合制学校 (Gesamtschule) を有する北部ドイツに比べ、古い制度を維持する南部ドイツのほうが、PISA の結果が良かったことを指摘し、問題は、教育制度にあるのではなく、子どもたちの社会的背景にあることを指摘している<sup>14)</sup>。すなわち、単線型教育制度への改革が、直接的に子どもたちの学力向上につながるわけではないというわけである。このドイツの事例は、同様の教育制度や文化を持つオーストリアでもほぼあてはまると考えられる。ドイツでも PISA ショック以降、改めて単線型の教育制度改革が主張されてはいるものの、オーストリアの NMS ほどに急進的な動きは見られない。

一方で、同じドイツ語圏を有するスイスに目を向けると、「HarmoS」という教育スタンダードや教育制度を包括的に改革するプロジェクトが進行中である。それは、義務教育年限の二年延長 (7 歳から 9 年間で 5 歳から 11 年間) と全州に拘束力をもつ教育スタンダードの設定を改革の両輪においたものである<sup>15)</sup>。教育制度改革を、早期教育に重点化したこと、教育スタンダードと教育制度を同時並行的にひとつのプロジェクトの中に位置づけたことがオーストリアとは大きく異なる点である。

ドイツ語圏の各国は、母語をドイツ語としない移民が多数いることで共通しており、そのため早期のドイツ語の習得をいずれの国も改革のひとつにしているが、教育制度改革として既存の前期中等教育の制度を変更しようとしたオーストリアと早期教育に重点を置き初等教育年限を延長したスイスとでは、大きな違いがあると考えられる。その差にどのような影響があるかは今後の経過を注視しなければならない。

### (2) 選抜機能が弱まったギムナジウムの実態

NMS の取り組みを相対化するもう一つの論点として、現在のギムナジウム進学における選抜機能の弱体化の実態がある。1960 年代から 80 年代にかけて、教育の爆発と呼ばれる現象が起き、ギムナジウムの生徒数が大幅に伸びた。元ウィーン大学のグルーバー (Karl Heinz Gruber) によれば、それにより、現在では、上位・中間層の保護者たちは、その子どもたちをギムナジウムに進学させることに概ね成功している。その結果、政治に参加しようとする社会階層において教育機会の平等を求めて、単線型の教育制度を主張する必要がなくなった。つまり、教育制度問題が現在ではこの国の政治的な論点として成立しなくなったのである。一方で、新自由主義の浸透により、オーストリアでも保護者による学校選択権の考えが定着し、またこれまで長年培われてきたギムナジウム信仰と合わさって、分岐型教育制度を支持する現状がある<sup>16)</sup>。上述した教育の質が低下する懸念から NMS に反対する AHS 保護者同盟の存在は、このことを証明している。

このような視点から NMS をみると、AHS は旧来の支持を保ちながら依然として残ることは明らかで、結局は AHS と NMS が並立する教育制度として、戦間期から議論されてきた単線型教育制度は今回もまた実現していないことになる。

## 6. おわりに

本稿では、PISA ショック以降のドイツ語圏の教育の動向を検討する研究の一環として、オーストリアの教育制度改革に着目した。オーストリアは、過去 10 年間の PISA 調査の結果から、学力向上政策のひとつとしての教育スタンダードの導入に始まり、長年、同国を含むドイツ語圏地域の教育問題であり続けたハウプトシューレを抱える教育制度問題の改善に着手した。それが、NMS という新しい中等教育学校の設置であった。教育相が 2016 年度までにすべてのハウプトシューレを NMS に改編することを宣言するなど、その改革は現在急速にすすめられている。

NMS では、AHS とハウプトシューレの教師によるティームティーチングや協同学習、プロジェクト学習などを導入することによって、これまでハウプトシューレや AHS にはなかった新しい教授・学習文化による中等教



育が目指されている。ただし、NMS はハウプトシューレからの改編がほとんどで、制度上可能である AHS から NMS の改編がほとんどないことなどから、結局はハウプトシューレの看板の付け替えとも見ることができる。オーストリアの教育制度は、結局、二分岐型という形を残すことになる。

この NMS の改革に先駆け、オーストリアでは教育スタンダードが学力向上政策として導入されたことは冒頭で述べた通りである。本来的には教育スタンダードと NMS が両輪となる教育改革が目指されているはずである。すなわち、教育スタンダードによって、すべての子どもたちが到達すべき基準を明確にし、前期中等教育段階を一本化する NMS を制度化することで、それを保障しようとした。その成果は、異なる教育制度改革のアプローチをとった他のドイツ語圏（ドイツやスイス）との詳細な比較を含めて、今後も検討を継続する必要がある。

PISA 以降、程度の差はあれ、いずれの国も何らかの PISA ショックを受け、その対応としての改革に取り組んでいる。オーストリアは中でも急進的に改革を進めているのではないかと思う。そしてこのような改革の成果は、今後もしばらくは続く PISA 調査で評価・分析されるのだろう。教育スタンダードを導入したとき、オーストリアの教育省は、「よい授業を提示しているわけではない」ことをかなり強調したものである。しかしながら、実際には PISA と OECD によって「よい教育」を成績上位の国の事例や学力格差を示す各種データで提示され、それに駆動されてこれらの諸改革がある。

オーストリアの教育改革は、現在も進行中である。先述のギムナジウムの問題に関していえば、マトゥア (Matura, ドイツでは Abitur) と呼ばれる大学入学資格試験を全国で統一化する動きが見られる。義務教育段階での教育スタンダードが後期中等教育にも拡大し、教育の標準化が教育課程全体に進められていると見ることができる。以上の検討は、今後の課題としたい。

#### 注

- 1) これまで、オーストリアを中心とした論考に、拙稿「オーストリアの教育スタンダード導入に関する一考察—ドイツ語圏における PISA のインパクト—」『教育目標・評価学会紀要』第 19 号, 2009 年, pp.27-36 や「PISA がもたらしたオーストリアの教育の変容—ドイツ語圏の「テスト文化」に着目して—」『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』第 48 号, 2012 年, pp.21-31 がある。また、ドイツ・オーストリア・スイスの教育スタンダードを比較検討したものに、拙稿「ドイツ語圏における教育パラダイムの転換—教育スタンダード策定の中央集権化と広域化—」『教育目標・評価学会紀要』第 22 号, 2012 年, pp.43-52 がある。
- 2) Jürgen Oelkers, Kurt Reusser, BMBF (Hrg.), *Qualität entwickeln-Standards sichern-mit Differenz umgehen* (Bildungsforschung Band 27), Bonn, Berlin, 2008, S.2.
- 3) <http://www.bmukk.gv.at/schulen/bw/nms/informationen.xml> (2012 年 9 月 18 日)
- 4) 詳細は、拙稿『戦間期オーストリアの学校改革—労作教育の理論と実践—』東信堂, 2010 年を参照されたい。
- 5) <http://derstandard.at/1316390080038/Bis-2014-Wien-stellt-alle-Hauptschulen-auf-Neue-Mittelschulen-um> (2012 年 9 月 18 日)
- 6) ハウプトシューレの教育目標に関しては、以下のように定められている。  
4 年間の基礎的な一般教育を課題としている。ハウプトシューレは、生徒たちの関心、傾向、能力、技能に基づいて職業生活における準備として、また中等・高等学校への移行のために能力をつける。  
実践と理論の結合ならびに生活に接近した授業 (“learning by doing”) にとりわけ価値が置かれる。これによって、若者の進学・職業への道のための堅固な基礎がつくられる。  
授業を効果的に行うことができるように、ハウプトシューレでは、ドイツ語・数学・外国語において、グループを作る。その中で、生徒の異なる学力や異なる速度に配慮する (太字は原文)。 <http://www.bmukk.gv.at/schulen/bw/abs/hs.xml> (2012 年 9 月 18 日)
- 7) [http://www.neuemittelschule.at/fileadmin/user\\_upload/pdfs/folder2011.pdf](http://www.neuemittelschule.at/fileadmin/user_upload/pdfs/folder2011.pdf) (2012 年 9 月 18 日)
- 8) [http://www.neuemittelschule.at/die\\_neue\\_mittelschule/paedagogische\\_konzepte.html#c9](http://www.neuemittelschule.at/die_neue_mittelschule/paedagogische_konzepte.html#c9) (2012 年 9 月 18 日)
- 9) <http://www.bmukk.gv.at/ministerium/vp/20110905.xml> (2012 年 9 月 18 日)
- 10) <http://derstandard.at/1293370849511/Elternvertreter-gegen-Ausweitung-der-Mittelschule> (2012 年 9 月 18 日)
- 11) Ebenda
- 12) <http://derstandard.at/1310511472826/Hauptschule-Umstellung-auf-Neue-Mittelschule-kostet-233-Millionen-Euro> (2012 年 9 月 18 日)
- 13) 教員集団の中では、教育スタンダードを、BISTA や BIST と略称して呼ぶ傾向がある。インタビューの記述においては、教師 A に倣い、BISTA と記すことにする。
- 14) 近藤孝弘「移民受け入れに揺れる社会と教育と教育学の変容」佐藤学ほか編著『揺れる世界の学力マップ』明石書店, 2009

- 年, pp.50-72/近藤孝弘「ショック療法の功罪ードイツにおける低学力問題をめぐる評価の政治ー」『教育テスト研究センター CRET シンポジウム 2010. 12 報告書』。http://www.cret.or.jp/j/report/101210\_Takahiro\_Kondo\_report.pdf#search='cret 近藤孝弘' (2012 年 9 月 18 日)
- 15) EDK, HaarmoS bringt der Schweiz elf Jahre Schulpflicht, Bildung Schweiz 3 2006, S 6-7 oder EDK, Haomonisierung der obligatorischen Schule Schweiz (HarmoS) Kurz-Information, S.1-2, Olivier Maradan und Max Mangold, *Bildungsstandards in der Schweiz Das Projekt HarmoS*, PH 1 akzente, 2/2005, S.3-7.
- 16) Karl Heinz Gruber, The German 'PISA-Shock': some aspects of the extraordinary impact of the OECD's PISA study on the German educational system. In *Cross-national Attraction in Education accounts from England and Germany*, Symposium Books, 2006, S.201.

■本稿は、科学研究費補助金（若手研究（B）研究課題番号 24730678 「ドイツ語圏の教育評価に関する総合的研究」）の助成を受け、調査・研究したものである。